COOP JOSO NEWS LETTER 2015 9−1
2015. 8. 17
COOP-JOSO News Letter
常総生活協同組合
発行／生協広報G
tel 0297-48-4911
2015 happy anniversary 40th

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

いのち育む食と地域環境を

常総生協商品のあゆみ 40 年に寄せて

副理事長　大石光伸

今週９月１回の商品カタログの表紙は「常総生協 40 年の商品のあゆみ」を掲載しています。

「常総生協組合員・生産者に育てられた」といつも語る大石副理事長に、時代の変化と常総生協の商品のあゆみ、食について常総生協が考えてきた事について語ってもらいました。

○常総生協に入った当時は？

私は常総生協が設立されて8年目に入協しましたが、常総生協はその出自（自治会の朝市）からしても、そのあゆみからしても生産者と消費者が共に苦楽を共にして作ってきた生協です。

当時は組合員の理事さん組合員さんが産地に行き生産者との話し合いや商品の企画をおこない、さらに石けん委員会や青果委員会などの専門委員会、そして小さなエリアなのに地区運営委員会が 12 もありました。

私はトラックで配達する先々で班の組合員のみなさんに徹底して教育を受けました。生産者も商品を届けに生協のプレハブによく来てくれていました。

○常総生協の精神をひと言で言うと？

「常総生協の商品政策は何なのか？」「基準は無いのか？」とよく聞かれます。

常総生協のあゆみを振り返ると、日本における地域生協誕生の社会背景（公害問題・食品添加物への意識）に規定され、その再編（合併吸収・巨大化）の波間に翻弄されて紆余曲折した歴史ですが、常総生協には「商品を生み、みんなで育てる」精神がいつも原点にあるように思います。「食はいのち」と共に言える関係こそ「いのちある食」を育てるものと思います。

○巨大化する生協を舞台に偽装事件

1980 年代後半からはじまる第Ⅱ期の「生協の連合化・巨大化」の中にすでに食がどう歪められてしまうかという問題の発端がありましたが、第Ⅲ期の 2000 年代に入ってから、「安心・安全」を謳っていた生協を舞台に「食の偽装事件」が噴出します。

巨大化した生協のグローバル商品戦略は 2008 年に「中国産 CO 餃子事件」として消費と生産の問題を顕在化させました。

今週のカタログ表紙では紙面の都合で社

○第Ⅲ期 1996 年～ 2010 年　食のグローバル化、菌の異変、噴出する食品事件

年	【食や環境をめぐるできごと】	【常総生協】
1996 年		北関東協同センター脱退「独立宣言」 「食はいのち」「正直に生きる」
	遺伝子組み換え食品輸入許可	遺伝子組み換え食品輸入許可取消を求める緊急署名を持って政府と交渉
	大腸菌 O-157 発生	大腸菌のベロ毒素産生遺伝子獲得は近代畜産による抗菌剤多用によるものとして畜産政策を整理。発酵飼料・放牧の岩瀬牧場開始。
		油の水素添加トランス脂肪酸排除方針（マーガリンの排除）、ω -6（n-6）系列の油（リノール酸）摂取制限方針。
1997 年	「環境ホルモン」概念発表される 厚生省「タマゴによるサルモネラ食中毒発生防止分科会」	毒性学が根本から覆される（微量でも影響、しきい値なし）。リプロダクトヘルス政策化。 「腸は免疫の司令塔」発酵食品重視政策
1998 年	サルモネラ問題で鶏卵洗卵・冷蔵流通指示 「有機」表示をめぐる有機農産物 JAS の動き	鶏卵無洗卵方針 有機農産物 JAS 化（商品化）反対声明
1999 年	東海村 JCO 臨界事故 周辺住民 600 余名が被ばく者認定	地場農産物等の放射農汚染緊急調査 「脱原発・エネルギー政策の転換についての声明」
2000 年	雪印食中毒事件 JAS 法改正で有機 JAS 認証制度導入される	スーパー等流通業の牛乳安売による生産原価割れが引き起こした事故と総括
	遺伝子組み換えトウモロコシによるアレルギー事件（殺虫毒素タンパク産生によるアレルギー発生 / 通称スターリンク事件）	食のグローバル化に対抗して 「地域自給宣言」発表 （生鮮品の 7 割の地域自給をめざす）
2001 年	日本で狂牛病（BSE）発生	草食動物にリサイクル飼料・濃厚穀物飼料を与える問題として動物の本来的飼育を
2002 年	雪印牛肉偽装事件 全農チキンフーズ偽装事件 関東の生協（コープネット）と全農が共同開発した「無薬飼料国産産直若鶏」にタイや中国産鶏肉を混入していたことが発覚	『常総生協食生活指針』発表 （主食6割、おかずを減らそう） →狂牛病の影響で鶏肉需要増し原料不足に。生協連合から「欠品は厳禁」とされたことから外国産を混入してまで欠品を回避が原因。
2003 年	モンサントら GM 大豆栽培事件 茨城県谷和原村の畑で遺伝子組み換え大豆（GM）試験栽培 常総生協らのすき込みを契機に全国6ヶ所で GM 大豆を秘密裏に栽培していたことが発覚	モンサントの動きについて農水省と協議を重ねるが対応せず。「私たちの大豆を遺伝子汚染させない」と、生産者と共にGM大豆すき込み行動。警察沙汰に。 県および環境省は国内 GM 栽培規制に動く。 谷和原村・生産者・おかべや・常総生協で地場大豆産直提携契約。
2004 年		自然の滋味「ダシをとろう」運動
2005 年	茨城県で鶏インフルエンザ発生	密飼の近代養鶏批判。地元有畜複合経営重視 地場契約大豆の不作に直面、大豆備蓄開始
2006 年	有機農業推進法制定	茨城県有機農業推進協議会へ参加。政策提言 「森・里・海の流域自給をつなぐ有機農業」
2007 年	（ミートホープ事件） コープ牛肉コロッケ偽装事件	地場有機小麦の契約栽培
2008 年	中国産コープ手作り餃子農薬混入事件	
	三笠フーズ「輸入事故米事件」 （商社経由で輸入されたコメでカビや残留農薬基準値以上の「事故米」を食用転売）	地場畜産の飼料自給化方針。 肉鶏用の飼料米生産契約。 鶏へ飼料用玄米を食べさせる実験
2010 年		TPP に対する理事会見解と地域自給方針決議
2011 年	東日本大震災 東電福島第一原発事故・放射能汚染	放射能による食品汚染対応。被ばく調査（健康調査）を開始。東海第二原発運転差止訴訟。 TPP 参加に反対して国会前座り込み

会の動きは省略されていますが、1996 年～ 2010 年までの食をめぐる社会的事件と、常総生協は食に対してどのような考えと対応をしてきたかを年表にしました（左表）。

1996 年の常総生協の「生協連合離脱」という組合員総会での決断は、コープ商品がなくなるという中で事実上の組合分裂という苦しみを伴いましたが、「正直に生きよう」と宣言して離脱したことはこれらの事件に巻き込まれずに済みました。

組合員によるこうした決断こそ実は「常総生協の商品政策」に他なりません。

2000 年には、「この先 10 年で食のグローバル化がすすむ。ならば地域で食糧自給しよう」という方針は食の安全を確保する道だったと思います。

○毒性に対する認識の転換

1997 年、化学合成物質や添加物に対する常総生協の考え方も大きく変わりました。「これ以下なら安全だという基準はない」と。

ほんの一分子であれ生体内の代謝を撹乱する「環境ホルモン様作用」の発表は、従来の農薬や添加物、合成洗剤やダイオキシン類の毒性に対する認識（急性毒性・慢性毒性・遺伝毒性・催奇形性等に「しきい値」があるという概念）を根底から覆した大きな転換点でした。

○脂質に対する対応

油（脂質）のトランス脂肪酸問題や n-6 系列の油の過剰摂取によるアレルギー誘導問題は常総生協内では意外に早く 1996 年前後には問題にされてマーガリンや油の商品取り扱いも絞り込まれました。

20 年後の今年、ようやくアメリカがトランス脂肪酸の排除を決めました。

○薬漬けの近代畜産から遠ざかること

効率優先、抗菌剤・ホルモン剤多用の近代畜産は「薬漬けのアニマルファクトリー」（動物工場）と言われていました。

常総生協は必死で近代畜産とは逆の生産の方向を模索し、飼料の地域自給にも生産者と共に取り組んできました。

山木屋牧場、鈴木牧場、サツラク農協、やさとの鶏肉・鶏卵、有機の卵、岩瀬牧場などは菌との共生、自然の摂理に添った生産です。

近代畜産の家畜の体内では、殺菌に対する微生物の生き残りの反撃のように、大腸菌は毒素を作る遺伝子を獲得し、鶏の盲腸で静かにしていたサルモネラ菌（SE：サルモネラエンティリティディス）は卵巣・卵管に追い出されて卵の中にまで侵入してきました（in EGG）。

草食動物の牛に草を食べさせるのではなく濃厚飼料を食べさせて牛独特の胃の微生物共生を破壊し、挙げ句に病死した牛の肉骨粉ﾐｰﾄﾎﾞｰﾝﾐｰﾙを食べさせるサイクルは世界に狂牛病（BSE）を発生させました。

○食のグローバル企業戦略に抗して

巨大バイオ企業モンサントによる遺伝子組み換え作物（GM）は、あらゆる加工食品に組み替えトウモロコシのコーンスターチを忍ばせ、ついに 2003 年日本の私たちの地元で GM 大豆の栽培を始めました。

常総生協は「私たちの大豆は絶対に汚染させない」と生産者と共に身体を張りました。

モンサントが日本各地で GM 大豆を秘密裏に作付けしていることが発覚して全国的な事件になってしまいましたが、グローバル企業による日本への食糧戦略を躓かせました。

○何をどう食べるか「食生活指針」

他方、「生協は安全な食品を提供すればそれでよい」とはせずに、「何をどう食べるか」もみんなで問う活動を続けてきたのは常総生協組合員の特徴です。

2001 年、食生活の欧米化に対して「常総生協の食生活指針」を対置し、毎年の期末試験のように「食生活点検表」による点検活動、食生活のバランスをとろうと努力を重ねてきました。

おかずを減らそう、肉や牛乳を減らそう、主食を6割、生きた発酵食品を、海藻を毎日、油の摂取を減らして・・・と日本の伝統的食文化と「粗食」の運動でした。

○「核の時代」の食と環境とは

40 年の歴史の最後に困難に襲われました。地域の食と環境の放射能汚染です。

1986 年チェルノブイリ原発事故でのヨーロッパの小麦汚染による CO イタリアスパゲッティーの放射能問題、日本まで森林汚染されて検出されたしいたけ問題、そして 1990 年代後半に続いた東海村再処理工場爆発事故や JCO 臨界事故は当時も生協内を騒然とさせましたが、すでにそれは 2011 年の福島原発事故を予感させていました。

もう桁外れな汚染で、大切に大切にしてきた食の安全とそれを生み出す大地や海が一瞬で汚染され、子どもたちのかけがえのない成長期の自然とのふれあいを奪われ、絶望の淵に落とされました。

皮肉なことにかつての経験と教訓が 2011 年の対応に生かされることになりました。それでもこの時代にたまたま生まれ、育ちゆく子どもたちへの健康影響は心配で、たいへんな事をしてしまったと悔やまれます。20-21 世紀の歴史の中のできごとです。

○共に「生き方」が問われる時代

他方で、福島の人々のリスクと犠牲の上に今の私たちの生活があったことに「自分たちのくらしを守る」とはいったいどういうことだったのか。共に汚染されてしまった田畑や海を前にして「生産者と共に安全な食べものを作り育てながら共に生きてゆく」ということの本当の意味も鋭く突きつけられました。

○悩みながら未来へつなぐ　足元から

常総生協組合員も生産者も、この原発事故汚染で困難を抱え、迷い、悩み、傷つきました。

時代も消費者意識も経済事情も大きく変わってしまったのかもしれませんが、今いちど足元からくらしのあり様を見つめ直し、家庭から地域から、協同の気持ちを寄せ合いながら組合員も支え合い、生産者と共に悩みも緊張感も共有しながら「いのち育める食と環境」をもういちど作ってゆく歩みをみんなで始めませんか。

「食はいのち」「ものづくり・人づくり・地域づくり」・・・消費者も生産者も共に協同し、食べるものを大切にする気持ちは今も常総生協の命脈として生き続けています。

40 年前に地元の生産者から野菜を頂こうとはじめた**朝市**から、正直に生きてゆこうとみんなで決意した **1996 年「独立宣言」**、地域自給・地域循環を大切にしようとした **2001 年「地域自給宣言」**は、常総生協組合員の（商品政策の）変わらぬ原点です。